論文の内容の要旨

論文題目　**Attachment and mental health for Chinese and Japanese youth: the role of personality, coping with stress, and culture**

(日本と中国の若者におけるアタッチメントとメンタルヘルスとの関連：パーソナリティ、ストレスコーピングおよび文化的要因からの検討**)**

氏　　名　　曲　暁艶

第 1 部　研究の概要

第 1 章　問題意識と研究の背景

アタッチメント理論は､親密な関係の特徴およびこの関係と精神的要因の関連を理解するための系統的な視点を提供する｡それは発達および適応の過程における阻害要因となるような対人関係を修正する治療理論を展開する点で示唆に富む｡そして、より効果的な介入を可能にするために､実証研究に基づくアタッチメントとメンタルヘルスの関連の内的メカニズムの解明が必要不可欠である。

しかし､成人アタッチメントがメンタルヘルスとどう関連するかについては, 未だに不明な点が多く残っている。それゆえ、本論文では、パーソナリティ、ストレスコーピングおよび文化的要因といった多面的な視点から､アタッチメントがメンタルヘルスに影響を与える心理的メカニズムを検討した。

第 2 章　先行研究の概観

第2章では、本論文における研究の理論的背景となる青年・成人期のアタッチメント理論について、Bowlbyのアタッチメント理論をはじめ、内的作業モデル、成人期のアタッチメントの測定などの説明を行った。また、青年・成人期のアタッチメントとメンタルヘルスがいかに関連するかを解明するために、パーソナリティ、自尊心、ストレスコーピングおよび文化受容といった介在要因や影響要因の、アタッチメントとの関連性について、先行研究のレビューを行った。最後に、日中の文化の差異を検討し、アタッチメントについての日中比較研究の重要性を指摘した。

第 3 章　研究の目的

本論文は､多面的な視点から､アタッチメントがメンタルヘルスに影響を与えるメカニズム

を検討することを目的としている。具体的には、アタッチメントとパーソナリティの関係に着目し、パーソナリティ障害に至るメカニズムを詳細に検討することを第一の目的とした。第二の目的は、アタッチメントとメンタルヘルスの関連において、自尊心、ストレスコーピングなどの要因の媒介作用を検討し、その関連に影響を与える内的メカニズムを明らかにすることである。最後に、日中の大学生のアタッチメント、ストレスコーピング、精神健康度の関連の比較研究、および中国留学生のアタッチメントとメンタルヘルスの関連における文化的要因の関与への検討を通して、アタッチメントとメンタルヘルスの関連について文化的な影響を越える普遍的な知見を得ることを目指した。

第２部　アタッチメント、パーソナリティとパーソナリティ障害との関連

第４章　予備調査１　AAS 中国語版の作成

第4章では成人アタッチメント尺度（AAS）を修正し、中国語版を作成した。2回の改訂により、元尺度と同じように親密性、依存性、不安性という三つの下位尺度を得た。また、項目分析、内的整合性、基準関連妥当性、構成概念妥当性（探索的因子分析と確証的因子分析）と項目全体間相関の検討を行い、AASの信頼性と妥当性を検証した。検証の結果、改訂後のAASに関するそれぞれの測定指標が良く、信頼性と妥当性が高いことを確認した。

第５章　予備調査２　PACL の大学生基準の確立

第5章では、中国の青少年805人を対象に人格尺度（PACL）の質問紙調査を行い、中国の青少年向けの人格障害の選別基準を確立した。Strackが提供したT得点の計算方法を用い、彼らの人格障害のカットオフポイントを算出した。この基準は他の人格尺度の選別基準と比べ、一層厳格である。研究の協力者は一般の中国人大学生に限ったものの、基準を定めた価値はあるといえる。

第６章　研究１　アタッチメント、パーソナリティ、パーソナリティ障害との関係

第6章では、第4章において作成した尺度と第5章において確立した基準を用いて、大学生のアタッチメントとパーソナリティ特性及びパーソナリティ障害の関係を検討した。具体的には３つの仮説を検証した。1つ目は、AASの下位尺度である親密性と依存性はPACLにおける積極的なパーソナリティ特性と正の相関があり、その一方で不安性と消極的なパーソナリティ特性の間には正の相関が存在しているということである。2つ目は、安定型のアタッチメントと積極的なパーソナリティ特性の間に正の相関があり、それに対して不安定型のアタッチメントと消極的なパーソナリティ特性の間に正の相関が存在しているということである。3つ目は、パーソナリティ障害傾向のある人は、アタッチメントの下位尺度の得点について正常な個人と大きな差異があるということである。

第３部　アタッチメントとメンタルヘルスの関連：媒介要因の検討について

第７章　研究２　中国人大学生のアタッチメント、自尊心と GHQ-20

第7章では、中国人大学生を対象として、2つのアタッチメント尺度（親密な対人関係体験尺度ECRと成人アタッチメント尺度AAS）を用いて、アタッチメント、自尊心とGHQ-20の関係を検

討し、自尊心の媒介作用が確認された。その結果、ECRの2つの下位尺度（親密性の回避と見捨てられ不安）が自尊心、GHQ-20の自己肯定と負の関連があり、GHQ-20のうつ、不安と正の関連があった。AASの不安性が自尊心、GHQ-20の自己肯定と負の関連があり、GHQ-20のうつ、不安と正の関連があった。AASの依存性が自己肯定と正の関連があった。さらに、高い自尊心がGHQ-20の高い自己肯定、低いうつ、低い不安を予測した。

第 8 章　研究 3　日本人大学生のアタッチメント、ストレスコーピングと GHQ-30 および QOL

第8章では，日本人大学生を対象に、アタッチメントと精神健康度（GHQ-30）および生活の質（QOL）との関連に、ストレスコーピングが影響を与える内的メカニズムを詳細に検討した。その結果，見捨てられ不安・親密性の回避とGHQ-30との間に正の関連があり、QOLとの間に負の関連が見られた。また、ポジティブコーピングが親密性の回避と生活の質の関連を媒介し、ネガティブコーピングが見捨てられ不安と生活の質の関連を媒介していることが分かった。すなわち、親密性の回避が高い人は、ポジティブコーピングを回避し、生活の質に悪い影響を与える一方、見捨てられ不安が高い個人は、ネガティブコーピングを利用し、生活の質に悪い影響を与えることが明らかになった。

第 4 部　アタッチメントとメンタルヘルスの関連：文化的要因の検討について

第 9 章　研究 4　アタッチメント、ストレスコーピングと GHQ-30 の関係：日中大学生の比較を通して

第9章では、日本と中国大学生を対象に、多母集団同時分析を用いて、アタッチメント、コーピング、GHQ-30およびこの三つの変数の関連性についての比較を行った。その結果、中国人と日本人大学生のアタッチメント、コーピング、GHQ-30において有意な差異が存在していることが明らかにされた。さらに、日本人と中国人のアタッチメントは異なったコーピング群を通して、GHQ-30の得点を予測した。その結果を踏まえて、文化的な視点から、両国の共通点と相違点に関する示唆が得られた。

第 10 章　研究 5　中国人留学生のアタッチメント、文化受容と GHQ-30

第10章では、日本に滞在している中国人留学生を対象として、アタッチメント、文化受容とGHQ-30の関連を検討した。一連の重回帰分析の結果によって、アタッチメントの見捨てられ不安はGHQ-30の6つの下位尺度を予測し、アタッチメントの親密性の回避と文化受容はGHQ-30の一部の下位尺度を予測した。文化受容はアタッチメントとGHQ-30の関係を調節する効果が見られた。さらに、日本における滞在年数はGHQ-30と正の関連が見られ、日本に滞在する年数が長いほど、精神的な健康状態が良くないという関連性が示された。

第 5 部　結論

第 11 章　研究の結論と示唆

第2部では、アタッチメントはパーソナリティ発達の一面として、パーソナリティと深い関連があり、パーソナリティ障害傾向の形成とも関連していることが示唆された。親子関係を重視し、より適応的なアタッチメントやパーソナリティの発展を促進することは、パーソナリテ

ィ障害の早期介入の手段として必要であるだろう。第3部では、アタッチメントはメンタルヘルスと直接的な関連性を有する一方、それらの間での自尊心とストレスコーピングの媒介効果も認められた。媒介要因の作用の検討を通して、アタッチメントがメンタルヘルスに影響を与えるメカニズムを一層明らかにするといえるだろう。第4部では、文化的要因に着目し、単一の文化社会環境を越えてアタッチメントとメンタルヘルスの関連性を検討した。日中大学生のアタッチメント、コーピングとGHQ-30の比較を通して、2つの文化がアタッチメントとメンタルヘルスの関係性に与える異なった影響、および2つの国における共通点と相違点が見出された。さらに、異文化受容プロセスにおける在日中国留学生のアタッチメントとメンタルヘルスの関連性に着目し、アタッチメントと文化環境が互いに作用しメンタルヘルスに影響を与えるメカニズムが示唆された。

したがって、アタッチメントとメンタルヘルスの関連は単純なものではなく，幼児期以降の出来事，社会的環境などの外的要因も精神発達や適応に影響を与えていると考えられる。アタッチメントを治療の中心とした場合、親子関係への早期の介入およびコーピングといった認知行動システムの修正はメンタルヘルスの促進に重要であると考えられた。

第 12 章　本研究の課題と今後の展望

第12章では、本研究のさらなる課題と今後の展望について述べた。本論文は，アタッチメントとメンタルヘルスの関連に関する横断研究である。アタッチメントとメンタルヘルスの関連性を検討したが、それぞれの時点でアタッチメントがメンタルヘルスに因果的に影響を及ぼすメカニズムを明らかにできなかった。さらに、媒介要因の選択により、アタッチメントとメンタルヘルスの関連をより深く検討することには限界が見出された。今後の課題として、縦断研究や質的研究法の活用が重要であると考えられる。